

# P-Fスタディにみる社会的表象としての攻撃反応の ジェンダー・バイアス

湯川 隆子\*

Socially Represented Gender Bias of Aggressive Responses Assessed by P-F Study

Takako YUKAWA

## 要 旨

本研究の目的は、男性の方が女性より攻撃的とする従来の通説を、P-Fスタディにみられる言語的攻撃反応の違いから再吟味することである。ちなみに、P-Fスタディとは、欲求不満場面に対する攻撃的言語反応のパターンを判定する半投影法である。本研究の参加者は大学生356名（男子174名、女子182名）である。本研究に合うようにP-Fスタディの原版が2つの点で改変された。1つ目は、24の欲求不満場面に対して「あなた自身の気持ち」からではなく「社会的に望ましい」と思う見方から反応するように教示を変えた点である。2つ目は、24の欲求不満場面の提示の仕方を、マンガスタイルではなく、会話スタイルのみにした点である。データは「日本版改訂P-Fスタディ・マニュアル」に従って整理、分析した。全参加者の反応1つ1つを9カテゴリー（攻撃の型と方向）のどれかに分類し、各反応の合計数を男女別に集計、分析した。主な結果は以下のようであった。(1) 男女とも教示に従って社会的に望ましいとされる非攻撃的な反応をすることができる。しかし、(2) 男子の方が、女子よりも外罰的な反応をする傾向が高く、反対に、女子は、男子よりも非攻撃的の反応が多かった。さらに、(3) 女子は「謝罪しながらもいいわけをする」傾向が見られた。以上のことより、欲求不満場面に対する攻撃的反応を教示によって抑えることは男女ともに可能だが、男子は女子に比べてやはり攻撃的の反応を行う傾向の高いことがわかった。

## 問 題

### I. 社会的表象としてのジェンダー・バイアス

ジェンダーは社会的表象のひとつである。より具体的に言えば、さまざまなジェンダー差、およびそれに付与されている差別や偏見・イデオロギーに関わる事象は、社会的表象の顕著な例である。「性差神話」「母性神話」など「男女間には絶対的な種々の違いが存在する」という、人びとに長く共有され、伝達されてきた認識や意識には、強固なイメージやステレオタイプが内包されている。ジェンダー差としてこれまで人びとの間で共有されてきたものには、実にさまざまなものが列挙される。しかし、心理学の諸研究では、生物学的・身体的な差はあるものの、われわ

2009年9月17日受理 \*社会学部心理学科教授

れ人間の能力や特性、思考や行動パターンなどに関して、人びとが信奉しているほどには差はないことが既に明らかにされてきているのである (Maccoby & Jacklin, 1974; Hyde, 1981)。現時点で、男女差が存在する可能性のあるものは、知的能力でみれば高々空間把握能力と数学能力における男子の優位性、言語能力における女子の優位性くらいである。人格面でみれば男子に顕著に認められる攻撃性のみである。これらの差には、ホルモンの作用と脳の構造および機能の人間の発生初期における違いが一因であるとする根強い主張もなされているが (Pinker, 2008)、一方で、それらへの反証も着実になされている (Hrdy, 1999; 長谷川, 2001)。まだまだ未解明の部分が多いというのが本当のところである。

事実や実体としての男女差の有無についての議論や検証がまだ十分になされていないにもかかわらず、人びとに「性差神話」や「母性神話」が蔓延している真の理由は、発生学や大脳生理学、進化心理学などの科学的知見にもとづいたものではなく、人びとが日常生活のいろいろな場面で遭遇する経験や印象によってであろう。ジェンダー・イデオロギーやジェンダー意識が過度に浸透、拡張され、世界や事物、事象を「ジェンダーのレンズ (Lenses of Gender)」から見る習性 (Bem, 1993)、即ち、人びとに共有され、構築されてきた社会表象としての「ジェンダー・バイアス」が、過度に人びとに保有されてきた歴史的結果にほかならない。ジェンダー・バイアスは、外部に存在する事実そのものであってではなく、あたかも実体があるかのように認識し、作り上げられてきたという意味で、表象作用そのものであり、ジェンダーが社会的表象である所以である。(社会的表象論についての論考は、他の好著に譲る (矢守, 1994, 2001; Moscovici, 2001)。

## II. 社会的表象としての攻撃性のジェンダー差

人格や性格特性のひとつとされる攻撃性は、ジェンダー・イデオロギーと深く関わっている。社会的表象としてのジェンダーのなかでも、攻撃性における男女差は、ジェンダー・バイアスを考える上で非常に重要である。ここでは少なくとも2つの問題点を指摘しておく。ひとつは、男性には攻撃性が社会的に容認されていること、ふたつ目は、攻撃性が男性の人間関係の発達を妨害していることである。

### (1) 男性に容認される攻撃性

攻撃性の発達や学習には、顕著な男女差が想定されている。男子は女子よりも攻撃水準が高く、暴力などの直接的な物理的・身体的攻撃性を示す傾向が高いとされる。一方、女子は攻撃水準そのものが低い上に、言語的攻撃や関係性を操作するという間接的な攻撃(仲間外れ、悪口、無視など)を示しやすいとされる。攻撃行動の発達・学習についての説明は多様であるが (Krahé, 2001)、男女差に関するものに限れば、多くの動物でオスの攻撃性が強いように、ヒトの場合でも同様、男性ホルモンの水準の高さや、繁殖行動における適応価を主張する生物学的・進化論の見地がある。その一方、ジェンダー・イデオロギーに根拠をおく社会的役割論、発達の・社会的認知論なども有力である。

攻撃性の男女差についての議論は近年活発だが、攻撃性の発達と「男らしさ」の獲得が深く関わっていること、男子と女子では攻撃性の社会的意味づけが異なっていることについてはどの理

論でも異論がない (Krahé, 2001)。女子と男子では社会化の目的と方向が異なる。女子には、攻撃性そのものの表出を「女らしさ」に反するものとして抑制するような社会圧がかけられるが、男子に対しては攻撃性が単に社会的に容認されるだけではなく、ある種の攻撃行動は望ましい社会的行動として奨励される。攻撃性の水準を高めること、そして、それをうまく社会的行動として発達させることが要請されているのである。攻撃性の表出の学習が男子にとって重要な意味をもつのは、これが「男らしさ」の証しである種々の「優越性」を示すだけでなく、こうした「優越性」獲得する上での、他者との競争や闘いに勝つための手段のひとつとなりうるからである。反社会的とされる最も素朴で低次元での「暴力」という行為でさえ、状況によっては「身体的・運動的優越性」を得るための手段になる。

攻撃性は多様な方法で表出される。たとえば、種々のスポーツは、ゲームという形で、身体的・物理的攻撃性が社会・文化的に表象化された表現行動のひとつといえる。これによっても「優越性」を手に入れることができる。また、乱暴な言葉使いや命令・叱責・非難などの言語的攻撃性、悪口・無視・排除（仲間外れ）といった関係性に対する攻撃、敵意・威圧・脅迫・示威、わがまま、過度の自己主張などの攻撃的自己表現も、攻撃性の表出パターン的一种と見なしうる。「野心」「闘争心」「上昇志向」「挑戦的」などの性格的な諸特徴も、攻撃性が望ましい心理特性として社会的に表象化されたものといえる。

男性にはこのような容認された方法で攻撃性をオープンに表出するスキルをもつことが期待されるのである。男子にとって攻撃性の社会化が成功することとは、必要な状況と場面において、社会的に容認された形で攻撃性を表出できるスキルを学習し、発達させることだといえる。しかし、この学習は容易ではない。攻撃性の表象に含まれる内容の中で、社会的に容認された攻撃性と反社会的な攻撃性（犯罪など）との線引きは現実には難しい。特に、体罰・しごきといった厳しい稽古（しつけ）と犯罪行為の境界線は微妙で紙一重である。軍隊における「武力」も、政治的意味においてのみ正当化しうる暴力である。

## (2) 男性の人間関係の発達を妨害する攻撃性

攻撃性は人間関係の発達に密接に関与している。われわれが対等な人間関係を発達させる上で、攻撃性は重大な阻害要因となりうる。人間関係を形成、維持していくためには、他者とうまくコミュニケーションをとる能力（相手と自分の立場を理解し、それに配慮しつつ、自己を適切に表現する力）が欠かせない。それを支えるのが認知的、感情的な発達であるが、これらの発達を妨げる危険性を攻撃性は有している。

他者への「優越性」に最大の関心を払う現代社会では、人間関係において、男子に勢力による階層が存在することはよく知られている。男子にとっては友人関係においてさえも、集団内での自分の位置（序列）が重要だともいわれる (Askew & Ross, 1988)。そこに「男らしさ」のイデオロギーが働いているのは明白である。上下関係で成り立つ人間関係においては、コミュニケーション能力は取り立てて必要ない。メンバー間に共通なルールがあれば十分である。ジェンダー・イデオロギーがそのルールとして強力に機能していることは推察に難くない (Askew & Ross, 1988)。さらにまた、「男らしさ」としての「優越性」を保つために、「感情を殺す」「感情を露わ

にしない」「弱みを見せない」「理性的に冷静に」「寡黙に」といった男らしいとされる行動特徴や性格は、高度で複雑なコミュニケーション能力を発達させることを抑制し、妨害する条件として働いている。男子が対等な人間関係を築く力に欠けていて、他者とうまくいかないと簡単に暴力に走り、時には犯罪にまで発展してしまうケースが昨今跡を絶たない。いじめや虐待、レイプやDVなどの犯罪は、暴力という形で感情が一気に爆発してしまった極端な事例である。男性の暴力行為の背景に、感情の調整能力やコミュニケーション能力の不足があるのは明らかだろう。特に身体的暴力は、人間関係を壊すだけでなく、相手を傷つけ、冒涇し、人権を侵害する最大のネガティブ要因である。

### Ⅲ. 言語表現にみる攻撃性の男女差

従来の攻撃性の男女差に関する研究は、どのような攻撃的行動が見られるかという直接的な物理的・身体的に顕在化された行動面でのものが多く、表象として人びとの心の内面に抱かれている、いわば隠された攻撃性までも捉えることは余りうまくできてこなかった。表面的には攻撃的でないような行動をとっているけれども、心のなかではどのように感じ、どのように思っているのか、行動の内側にある攻撃性の心理的性差をみることは非常に重要であったにも関わらず、発達研究では、性格特性を測る尺度や検査のなかでか、あるいは、一部の臨床心理的な技法などに限られてきた。攻撃性が関与しているような刺激状況におかれたとき、人はどのような反応をするのか、その人の抱いている潜在的な攻撃的心理を浮き彫りにすることが是非とも必要である。日常的によく直面する具体的な場面において、何らかの対応を迫られた時に発される言葉の中に現れる男女差を読み取ることで、社会的文脈の中での生きた男女差を引き出すこと、即ち、攻撃性の社会的表象の中身や性質を浮き彫りにすることは非常に重要な視点であろう。それに適した測定具のひとつとして、ここでは『P-Fスタディ』をとりあげる。

#### (1) P-Fスタディ

『P-Fスタディ』とは、絵画欲求不満研究(テスト)(The Picture-Frustration Study)の略称で、創案者ローゼンツァイク(S. Rosenzweig)が考案したテストである(住田・林・一谷, 1964)。ローゼンツァイクは、自我の独自性に人間の個性像の理解を見出そうとし、個体の示す種々の不満反応様式を分類することによって、その背景にある精神力動性を発見する手がかりにしようとした。テストは24種の日常普通に誰でもが経験する欲求不満場面によって構成されている。漫画式の絵により、反応を構成しやすいような刺激を与えて、被験者が最初に浮かべる連想を求め、初めに思いついた言葉を回答させるものである。テストの場面は大きく次の2つに分けられている。

**〈自我阻害場面〉**：人為的、非人為的な障害によって直接に自我が阻害されて欲求不満を起している場面で、計16場面から構成されている。

**〈超自我阻害場面〉**：誰か他の者から非難、詰問されて、いわゆる超自我(良心)が阻害されて欲求不満を招いた場面(自分が悪い、または悪いことをしたという良心の呵責からくる場合)。計8場面からなる。

これらさまざまな欲求阻止に出合う時、人は不満の情緒の状態になっている。それは自我体制の均衡が破れた不安定な状態であり、次のような行動が展開されると予想されている。

①**自我の攻撃方向から（攻撃の向けられる方向）**

- a) **外罰的**：人や物、状況に攻撃が向けられているもの
- b) **内罰的**：自分自身に攻撃が向けられているもの
- c) **無罰的**：欲求不満をうまくごまかしてしまうか、うわべだけを繕って攻撃を避けてしまうもの

②**反応展開の時間的経過の段階から（反応内容のタイプ・型）**

- a) **障害優位**：欲求不満を起こした障害をはっきり述べているもの
- b) **自己防衛**：自我を強調しているもの
- c) **要求固執**：欲求不満の解決を強調しているもの

これら①の攻撃方向と②の反応内容型との組み合わせから、24の各場面での評定が9種類のカテゴリーに分類される。これをP-Fスタディの基本反応項目と呼んでいる。(表1-1, 1-2 参照)

(2) **P-Fスタディの男女差**

『P-Fスタディ』（オリジナル版）には、当初からいくつかの発達差や男女差が指摘されている（Rosenzweig, 1978）。まず、発達のには、児童では、外罰的反応が4歳から13歳にかけて減少し、内罰的反応、無罰的反応が増加すること、およびGCR（社会的適応の指標<sup>1)</sup>）がかなり上昇するとされる。このような傾向は欧米（アメリカ、フランス、イタリア、ドイツ、スウェーデン）、アジア（日本、インド）などの文化圏の違いを超えて共通にみられる。青年期には、外罰的反応と自己防衛反応が強くなるが、この傾向は男子に顕著に認められる。10代の終わりになると、男女とも13歳の水準に戻る。

ちなみに、男子と違って女子は、青年期の初期から後期にかけて、要求固執反応が増加する。これは、女子は男子よりも身体的、精神的に早く成熟し、敵意的攻撃反応の表出を別の形で表すことが早くからできるようになるためであり、一般的に知られている攻撃性の男女差の知見を支持している。

次いで、テストに一貫して見られる男女差については次のことがわかっている。男性はE-A（外罰的反応）、E-D（自己防衛）の評点が高く、女性はI-A（内罰的反応）、M-A（無罰的反応）、GCRが高い。「P-F 児童用」では、P-Fに関連する種々のデータ（健常児と障害児の比較、旧西ドイツとガテマラの文化比較など）いずれにおいても、有意な男女差は認められていない。次いで「P-F 青年用」では、ドイツの青年男子は女子よりも、有意に高い外罰的反応と生態防衛（自己防衛）反応を示し、I-A（内罰的反応）、M-A（無罰的反応）、N-P（要求固執）反応は低い。一方、女子は有意に高い自責（内罰的反応）、無罰的反応、要求固執的反応、GCRを示す。しかし、「P-F 成人用」になると、男性にやや有意な外罰的反応がみられる程度で、顕著な男女差は認められなくなる。なお、高齢者の男女差に関する実証データはまだほとんどない状況である。

以上にみたように、男子と女子は青年期においてのみ、言語的攻撃反応が有意に異なるが、児童期と成人期では、男女共に健常な人は要求不満場面に対して同じ発達パターンを示す。しかし、

成人後期、老年期になるとまた変化が生じると予想されている。

これらのことより、P-Fテストは、攻撃性における男女差、特に青年期の男女差には敏感である。「男性は女性よりも攻撃を外部に向ける」という従来の「攻撃性仮説」を、言語的攻撃反応において吟味するのに有用な測度であるといえよう。

## 目 的

本研究の目的は「P-Fスタディ」への回答に際し、欲求不満場面に対する攻撃的反応の表出を抑制するよう期待された場合、青年男女間にどのような差がみられるかを検討することである。

問題で述べたように、P-Fスタディは、ある人が具体的な欲求不満の状態におかれ、何らかの対応を迫られているという場面において、その人がどのような言葉を返すかを問うものである。そこでは実際に行動を起こす顕在的な攻撃反応ではなく、責められている時にどのように感じ、どのように対応するかを心の中で考えて表現するという言語的な反応、いわば内面的な潜在化された攻撃反応が表出されやすいと考えられる。今回はそうした隠された攻撃性をより引き出す目的でP-Fスタディを用い、これまで議論されてきた性差について再吟味をおこなうものである。

本研究では、P-Fスタディの原版通りの刺激図版および教示方法（漫画スタイルの刺激図版と「対応を迫られている人が答えると思われる言葉（つまり、あなた自身の気持ち）」を問う教示）を用いるのではなく、**会話形式の文章による刺激文**に対して、「**どのような対応が『望ましい』と思うか、社会的に望ましいと思われる言葉を回答する**」という教示に改変した。それは「望ましいと思われる言葉」を問うことで、攻撃反応の表出それ自体が抑えられるか否か、あるいは表出されたとして、それはどのような特徴をもったものか、という潜在的な次元での攻撃性の性差について検討できると考えたからである。

今回、調査対象として大学生を設定した。その理由は、大学生という年代層は、その時代の文化や空気を敏感に感じ取り、その時代の風潮をより端的に映し出す世代であり、P-Fスタディにおいても最も性差が明瞭にみられる年代だからである。また、年齢的にも大学生であれば、知識や言語能力の点でも一応の発達水準に達しており、「会話形式の刺激文に対して、望ましい反応を回答せよ」という抽象的な教示にも十分に対応可能と想定されたからである。

## 方 法

(1) **調査対象者**：公立および私立の4年制大学学生356名（男子174名、女子182名）。内訳は次の通りである。

・私立大学（男子39名、女子72名）、公立大学（男子135名、女子110名）

(2) **調査手続きと教示**：筆者の教示の下での集団施行による。

絵による漫画スタイルではなく、**言葉による会話スタイル**に改変した24の欲求不満場面を冊子にして配布し、「どのような対応が望ましいと思うか、**『社会的に望ましい』**と思う見方から**最初に浮かんだセリフ（ことば）**を書くように」という教示を与えた（表1-1参照）。実施の所要時

間はいずれの対象者においても1時間程度であった。

(3) 調査日時：私立大学は1990年7月、公立大学は1991年6月に調査した。

#### (4) 評点方法

「ローゼンツァイク・改訂版・P-Fスタディ使用手引き（住田・林・一谷, 1964/1973）」にそって、24の欲求不満場面に対する全調査対象者の全ての反応内容1つ1つを、「どの方向に攻撃を向けているか」「どのような型の内容か」という2点から9カテゴリーに分類する。9カテゴリーの具体的な反応タイプ（評点記号）は次のようである（表1-2参照）。

〈攻撃の方向〉

- (1) 外罰的方向 (Extrapunitiveness) (E)
- (2) 内罰的方向 (Intropunitiveness) (I)
- (3) 無罰的方向 (Impunitiveness) (M)

〈反応の型〉

- (1) 障害優位型 (Obstacle-Dominance) (O-D)
- (2) 自己防衛型 (Ego-Defence) (E-D)
- (3) 要求固執型 (Need-Persistence) (N-P)

評点記号として用いられるE, I, Mは、各々外罰的、内罰的、無罰的の頭文字をとったものである。そして、それらが障害優位型である場合にはE'、I'、M'と書き表す。また、自己防衛型の場合はそのままE、I、Mと書く。このとき、超自我阻害場面において、監視を何とかごまかそうと強く働く場合は、E、Iと書き表す。Mの出現は基本的に想定されていない。それは、自己の弱点、失策、非行などを全く無視することではじめからなかったと思う場合と同様の反応であり、従って、起こった反応は自我阻害場面の反応表現のMと同じものになると解釈されているからである。要求固執型の場合はe、i、mと書く。また、どのカテゴリーにも当てはまらない反応語はUと書く。

## 結果

### (1) 分析のための分類手順

整理と分析は『ローゼンツァイク・改訂版・P-Fスタディ使用手引き』（住田・林・一谷, 1964/1973）に準拠し、調査対象者の場面ごとの反応を「攻撃の型と方向」の2点から9つのカテゴリーに分類した。

分類作業は、筆者を含めた3名（内2名は心理学を専門とする研究者）で行った。具体的には、まず筆者らが別個に行った分類を3名で確認するという手順で行い、意見が分かれた場合には、『使用手引き』の評点上の注意を参照しつつ、多数決によった。一致率は約80%であった。

『仕方ない』『結構です』『そうかなあ』など、その言葉だけで意味をもつのか、その後に続く文とどのような関係にあるのかに特に注意し、それだけでは意味をもたないものは例外(U)とし、意味をもつと判断されたものは、カテゴリーのどれかにあてはめ分類した。24場面について「自我阻害場面」「超自我阻害場面」別に同一カテゴリーに分類された反応数を男女別に集計した。

## (2) 分析結果

分析結果について、まず、本調査対象者の全体的な傾向を示し、次いで、男女差について詳述する。

### I. 全体的な傾向

場面1から場面24について、どんな評点記号が出現しているかをみることによって、今回の調査対象者の全体的な傾向を把握することができる。各カテゴリーの頻出度からその傾向を概観する。

#### (1) 自我阻害場面

自我阻害場面では、各カテゴリーの頻出度にばらつきがみられた。男女全体でみると、**M, m** 反応が高く、**E', E** 反応がそれに続いている。特徴的なのは、**I'** 反応が男女とも他の反応に比べて低くなっていることである。この**I'** 反応は、失望や不満を抱えていることを外に表さずに、不満を抑えて障害の存在が自分にとってはかえって有益なものであるとさえするものだが、本対象者にはこの種の反応が余りない。次いで男女差についてみると、**E', E, e, i, m** 反応において男子が高い。外罰的方向を表す**E', E, e** 反応、要求固執型を表す**e, i, m** 反応が男子で高くなっている。これらの反応は、相手に攻撃を向け、かつ問題の解決に関する内容に言及するものであり、その傾向が女子よりも男子に強いことが窺われる（表2、図1）。

#### (2) 超自我阻害場面

超自我阻害場面については、全体的にみて**I, i, E** が高い。これらの反応は、自己の責任を率直に認めるか、一応の責任は認めるという反応だが、**I, E** がともに高いことから、素直に非を認めるというよりは、開き直るか、あるいは、非を認めながらも生じた障害やその解決により言及するというものである。これらの反応からは、自己の非は認めつつも、自我が極力傷つかないようにする傾向を読み取ることができる。この中での男女差をみると、**I** は男女共に高いが、**i, E** は男子のほうが高い。**M** 反応以外の評定因子では差がほとんどないが、**M** 反応で女子の方がわずかに高い。この反応は、欲求不満が喚起された事態で、自分が責められているにもかかわらず、事の責任をどこにも求めず、曖昧にしようとする態度である（表2、図2）。

以上 (1)、(2) の結果にみられるように、今回の調査では反応の出現頻度にやや偏りが見られ、自我阻害場面では **M** 反応、つまり「無罰的・自己防衛型」が、超自我阻害場面では、**I** や **i**、それについて **E** 反応が多かった。即ち「内罰的・自己防衛型」と「外罰的・自己防衛型」が多かった。この結果を、問題の項で述べた青年期の男女差の知見に照らしてみると、男子の「外罰的」傾向がかなり低く、女子の傾向に近くなっている。このような結果になった理由は教示の違いにあるといえる。「P-Fスタディ」（オリジナル版）での教示は、「対応を迫られている人が答えると思われる言葉、つまり、あなた自身の気持ち」を回答させるものであるが、今回の調査では「望ましいと思われる言葉」を回答させている。このことは、本研究の目的である「欲求不満場面に対

する攻撃的反応の表出を抑制する」ように働きかけ（教示）がなされた場合には、本調査の青年男女は、期待に沿って攻撃的な言語反応を抑制し、社会的に望ましいとされる対応をとることができることを意味している。本対象者が社会的に望ましいという意味を理解できているということでもある。

なお、オリジナルの『使用手引き』あるいは『P-Fスタディ』に関する研究書（Rosenzweig, 1978）で、男女差の知見が指摘されてから、本調査時点（1990～1991年）まで10年強の隔たりしかないものの、年代による差が全く生じていない可能性は否定できない。この点についての留意が必要かもしれない。

## II. 男女別の傾向

### (1) 全体からみた男女の比較

前述したように、全体からみると、自我阻害場面では「無罰的・自己防衛型（M）」が相対的に高くなっており、超自我阻害場面では「内罰的・自己防衛型（I）」および「外罰的・自己防衛型（E）」が高くなっていった（表2、図1、2）。これらを踏まえて、男女差について具体的にみていく。

男女差がみられたものは、自我阻害場面の外罰的方向で、男子19.58%、女子14.70%となっており（ $\chi^2=15.02$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）（表4、図3）、超自我阻害場面の外罰的方向でも、男子24.43%、女子13.88%であり（ $\chi^2=35.71$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）（表6、図6）、いずれにおいても男子が有意に高い。超自我阻害場面の内罰的方向では、男子63.36%、女子76.10%（ $\chi^2=24.40$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）と女子が有意に高い（表6、図7）。自我阻害場面の無罰的方向でも、男子45.91%、女子50.55%（ $\chi^2=12.16$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）と女子が有意に高い（表4、図5）。また、反応の型についてみると、超自我阻害場面では、障害優位型、自己防衛型いずれにも男女間に有意差は認められないが、要求固執型において、男子14.66%、女子9.19%と有意な差がみられ（ $\chi^2=14.96$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）、男子が高い（表11、図14）。

### (2) 反応の方向からの分析

#### 1) 24場面全体を通しての反応傾向

まず、超自我阻害、自我阻害を含めた24場面全部を通しての男女全体の反応をみる（表3）。外罰的方向17.74%、内罰的方向33.89%、無罰的方向33.01%となっており、外罰的方向がやや低いという結果になっている。男女別に見ると、男女それぞれ、外罰的方向が21.19%、14.43%、内罰的方向が31.21%、36.47%、無罰的方向が31.45%、34.51%となっており、外罰的方向においては、男子が有意に高いが（ $\chi^2=44.59$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）、内罰的方向（ $\chi^2=26.89$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）および無罰的方向（ $\chi^2=12.01$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）においては、女子が有意に高くなっている（表3）。

反応内容の内訳をみると、内罰的方向で、I反応とI<sub>1</sub>反応に注目すると、I反応は男子7.83%、女子6.92%、I<sub>1</sub>反応はそれぞれ4.58%、6.27%と男女で逆転しており、女子は弁解する傾向が窺われ、I<sub>1</sub>反応において女子が有意に高い（ $\chi^2=14.11$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。組み合わせの反応をみると、無罰的方向において女子が有意に高い（ $\chi^2=81.99$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）（表3）。

## 2) 自我阻害場面

ついで、自我阻害場面における男女差をみている（表4、図3、4、5）。男女とも無罰的方向が最も高く、男子45.91%、女子50.55%であり、男女ともに半数近くが自己または他人に対する非難を避けて、この欲求不満場面をうまくごまかす対応が望ましいと考えているようだが、女子のほうによりこの傾向が有意に高い（ $\chi^2=12.17$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。外罰的方向は、男女それぞれ19.58%、14.70%であり、ここでは男子が有意に高い（ $\chi^2=15.02$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。内罰的方向は、男女それぞれ、15.22%、16.70%であり、有意な差はみられない。反応数の割合の高い順は、男子では、無罰的方向、外罰的方向、内罰的方向であり、女子では無罰的方向、内罰的方向、外罰的方向となっていて、男女間でわずかに異なっている。

反応内容の内訳をみると（表5）、外罰的方向では男女とも **E'** 反応がそのカテゴリーの中では高く、男子36.68%、女子34.89%であり、男子が有意に高い（ $\chi^2=7.73$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。次いで **E** 反応が、それぞれ31.02%、30.91%で、男子が有意に高い（ $\chi^2=4.78$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ）。組み合わせは、頻度が低い中でも **E'-e** 反応がその中で高く、それぞれ4.93%、5.85%であるが、男女差はない。内罰的方向では、**I'** 反応が男子37.32%、女子36.08%、**i** 反応が男子37.32%、女子35.26%と、いずれも男子の方が若干高いが、それほど男女差はない。また **I**、**I** 反応に注目して見ると、**I** 反応が男子12.91%、女子8.66%、**I** 反応が、それぞれ7.51%、9.90%となっており、男子は素直に謝るものの、女子は言い訳じみた言葉を後で付け加える傾向が窺われる。組み合わせ反応は、**I-i** 反応が、男子2.35%、女子4.33%となり、ともに低い中で女子が有意に高い（ $\chi^2=3.90$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ）。**I-i** 反応がそれぞれ2.58%、5.57%となり、女子が有意に高い（ $\chi^2=6.74$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。組み合わせ反応も含めると、**i** 反応は男子42.25%、女子45.15%となり、女子に自ら努力して解決しようとする傾向がやや見られる。無罰的方向では、**M** 反応が、男子47.86%、女子48.09%となり、女子が有意に高い（ $\chi^2=6.27$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ）。1つのカテゴリーのみの反応の合計数と組み合わせの反応の合計数間で有意差がみられた。即ち、1つのカテゴリー合計数においては、男子が有意に高く（ $\chi^2=6.99$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）、組み合わせ反応合計数においては、女子が有意に高かった（ $\chi^2=13.12$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。

## 3) 超自我阻害場面

続いて、超自我阻害場面における男女差についてみる（表6、図6、7、8）。男女とも内罰的方向が最も高く、男子63.36%、女子76.10%であり、ともに自己に責任があることを認める対応が望ましいと考えているようだが、女子は男子よりも13%近くも高くなっており、女子が有意に高くなっている（ $\chi^2=24.40$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。女子の方が相手に対して申し訳なかったという気持ちが強く表れている。外罰的方向は、それぞれ24.43%、13.88%であり、男子が女子よりも11%近く高くなっており、男子が有意に高い（ $\chi^2=35.71$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ）。男子は攻撃を外に向ける傾向が表れている。無罰的方向は、それぞれ2.37%、2.35%と、ともに極めて低く、男女差もみられない。反応数の割合の高い順は、男女とも、内罰的方向、外罰的方向、無罰的方向となっている。超自我阻害場面であるため、無罰的方向が低くなることは十分に考えられることである。

反応内容の内訳をみると（表7）、外罰的方向では、**E** 反応がこのカテゴリー内で最も高く、

男子60.00%、女子46.77%と、男子の方が女子よりも14%近く高く、男子が有意に高い( $\chi^2=40.60$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。男子に攻撃を外に向ける傾向が強く表れている。内罰的方向では、I反応が男子30.95%、女子23.50%、I'反応は、それぞれ18.14%、20.42%となっており、男子は素直に謝るが、女子は言い訳じみた言葉を後に追加する傾向がみられる。I'反応において女子が有意に高い( $\chi^2=10.97$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。i反応は、それぞれ16.33%、9.26%となり、男子の方が女子よりも高くなっており、男子が有意に高い( $\chi^2=7.17$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。これは自己の責任を重く受け止め、自ら解決して何とか償おうとする気持ちがうかがわれる。組み合わせ反応は、I-i反応で、男子14.06%、女子20.24%となっており、女子が有意に高い( $\chi^2=28.24$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。組み合わせ反応を含めると、i反応は男子31.63%、女子32.58%となり、男女差はみられない。このことから、男子はシンプルな一言で表現するのに比べて、女子は何らかの言葉を付け加えて謝る傾向がある。組み合わせの反応において、女子が有意に高い( $\chi^2=70.88$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。無罰的方向では、M反応は、男子45.45%、女子82.35%であり、女子が圧倒的に高くなっており、女子が有意に高い( $\chi^2=3.93$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。m反応は、男子54.55%、女子17.65%となっており、男子が有意に高い( $\chi^2=6.00$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。男子は時の経過で事を解決しようとする傾向が認められる。

### (3) 反応の型からの分析

#### 1) 24場面全体を通しての反応傾向

男女合わせた24場面全体(自我および超自我阻害場面)での反応の型をみると(表8)、障害優位型18.68%、自己防衛型38.71%、要求固執型18.31%となっており、自己防衛型が高くなっている。男女別にみると、男女それぞれ、障害優位型18.95%、18.43%、自己防衛型39.47%、37.98%、要求固執型19.42%、17.23%となっている。反応内容の内訳をみると、障害優位型は、E'反応が、男子4.80%、女子3.45%と男子が有意に高い( $\chi^2=7.41$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。I'反応は、それぞれ6.94%、7.40%、M'反応は、それぞれ7.18%、7.35%で、男女差はみられなかった。自己防衛型は、M反応がそのカテゴリー内で高く、男子15.03%、女子16.87%と女子が有意に高い( $\chi^2=17.42$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。要求固執型は、m反応がそのカテゴリー内では高いが、それぞれ7.64%、7.63%で、男女差もみられない。

#### 2) 自我阻害場面

自我阻害場面における反応の型の男女差をみる(表9、図9、10、11)。自己防衛型が最も高く、男女それぞれ、32.05%、32.82%、障害優位型は、それぞれ23.65%、22.52%、要求固執型は、それぞれ21.79%、21.25%である。反応総数の割合の高い順は、男女とも自己防衛型、障害優位型、要求固執型となっている。

反応内容の内訳をみると(表10)、障害優位型では、男女ともM'反応がそのカテゴリー内で高く、男子45.47%、女子48.93%となっている。E'反応はそれぞれ30.36%、22.78%であり、男子が有意に高い( $\chi^2=7.73$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。組み合わせの反応では女子が有意に高い( $\chi^2=7.36$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。自己防衛型では、M反応が、男子68.56%、女子74.08%と、女子が有意に高い( $\chi^2=6.27$ ,

df=1,  $p<.05$ )。次いで **E** 反応が、それぞれ18.95%、13.85%となり、男子が有意に高い ( $\chi^2=4.78$ , df=1,  $p<.05$ )。I、**I** 反応に注目すると、I 反応は、男子6.13%、女子4.41%、**I** 反応は、それぞれ3.57%、5.04%となっており、男子は素直に謝るが、女子は言い訳じみた反応をしている。要求固執型では、**m** 反応がそのカテゴリ内で高く、男子49.51%、女子52.84%と半数を占めている。男女ともに時の経過で解決を図ろうとする傾向がある。次いで、**i** 反応が、それぞれ26.07%、27.71%となっており、男女差はみられない。**e** 反応は、それぞれ23.61%、18.15%と、男子が有意に高い ( $\chi^2=4.00$ , df=1,  $p<.05$ )。

### 3) 超自我阻害場面

超自我阻害場面についてみる (表11、図12、13、14)。自己防衛型が最も高く、男女それぞれ54.38%、48.34%と約半数を占めている。障害優位型は、それぞれ9.48%、10.22%、要求固執型は、それぞれ14.66%、9.19%となっており、要求固執型においてのみ男子が有意に高い ( $\chi^2=14.66$ , df=1,  $p<.01$ )。反応数の多い順をみると、男子は、自己防衛型、要求固執型、障害優位型、女子は、自己防衛型、障害優位型、要求固執型となっている。どちらの場面においても、男女ともに自己防衛型が望ましいと考えているようである。

反応内容の内訳をみると (表12)、障害優位型では、**I'** 反応が、男子100%、女子99.32%とほとんどを占めている。自己防衛型では、**I** 反応がそのカテゴリ内で高く、男子36.06%、女子37.00%となり、男女差はみられない。**E** 反応は、それぞれ26.95%、13.43%と男子の方が女子より13%近く高くなっており、男子が有意に高い ( $\chi^2=40.60$ , df=1,  $p<.01$ )。一方、**I** 反応は、それぞれ21.14%、32.14%と、女子の方が男子より11%近く高くなっており、女子が有意に高い ( $\chi^2=10.97$ , df=1,  $p<.01$ )。**M** 反応は、それぞれ1.98%、4.00%と低いが、女子が有意に高い ( $\chi^2=3.93$ , df=1,  $p<.05$ )。要求固執型では、**i** 反応がかなり高く、男子70.59%、女子76.69%となり、男子が有意に高い ( $\chi^2=7.17$ , df=1,  $p<.01$ )。**e** 反応は、それぞれ20.59%、16.54%となり、男子が有意に高い ( $\chi^2=6.25$ , df=1,  $p<.05$ )。**m** 反応は、それぞれ8.82%、4.51%となり、男子が有意に高い ( $\chi^2=6.00$ , df=1,  $p<.05$ )。

### (4) 組み合わせ評点からの分析

これまでの分析で、攻撃的な言語反応においてもやはり男女差が見られ、その違いが明瞭になってきた。このような特徴が、それぞれの場面で回答された組み合わせ反応、言い換えると、欲求不満場面に対面したときに、端的でシンプルな反応ではなく、種々の言葉を重ねるような反応においても男女差が認められるかを分析した。ここでは、図表の数が膨大になるので、個々の図表を掲げることが省き、これまでの分析と同要領で行った結果の概要を記す。

#### 1) 24場面全体を通しての反応傾向

組み合わせ反応は全体の15.86%を占め、男子5.28%、女子10.58%であった。自我阻害場面では全体の8.32%、超自我阻害場面では7.54%と、それぞれの頻度はあまり変わらないが、男女別で見ると、自我阻害場面は、男子5.89%、女子10.66%、超自我阻害場面は、男子4.87%、女子

10.11%となっており、女子に頻度が高い。

a) **自我阻害場面**：**M-m** 反応がそのカテゴリー内で最も高く、男子21.46%、女子19.83%となり、男子が有意に高く ( $\chi^2=10.49$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )、次いで **E'-m** 反応が、それぞれ11.74%、13.15%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=11.38$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。 **E'-M** 反応は、男子6.88%、女子12.28%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=21.62$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。 **I-i** 反応は、男子4.45%、女子5.82%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=6.47$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。 **I-i** 反応は、それぞれ4.05%、4.53%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=3.90$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。 **E** が含まれる反応は見られない。

b) **超自我阻害場面**：**I-i** 反応が、男子60.78%、女子50.68%と組み合わせでは高い割合である。**E-**の組み合わせは男子の方が多く、**E-**、**I'-i**の組み合わせは女子の方が多い。**E'**、**m** が含まれる反応は見られない。

## 2) カテゴリー内の組み合わせ評点

a) **場面全体での反応傾向**：全体の10.11%を占めており、男子3.45%、女子6.66%であり、女子が有意に高い ( $\chi^2=86.89$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。

b) **自我阻害場面**：男子2.12%、女子3.49%となり、女子のほうが高い ( $\chi^2=19.01$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。内容をみると、男女とも**M-m** 反応がそのカテゴリーの中で高く、男子43.80%、女子46.23%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=5.25$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。 **E'-e** 反応は、男子22.31%、女子12.56%である。 **I-i** 反応は、それぞれ9.09%、13.57%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=6.73$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。 **E** や **I** は見られない。

c) **超自我阻害場面**：男子6.13%、女子13.03%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=70.62$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。反応の内容をみると、**I-i** 反応が、男子71.26%、女子60.27%となり、男子が有意に高い ( $\chi^2=28.24$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。 **I'-i** 反応は、それぞれ18.97%、21.89%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=20.21$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。 **I'-I** は、それぞれ1.72%、4.32%となっている。**M'**、**m** 反応は見られない。

## 3) カテゴリー間の組み合わせ評点

a) **場面全体での反応傾向**：全体の5.75%を占め、男子1.83%、女子3.92%となっており、女子が有意に高かった ( $\chi^2=65.25$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。

b) **自我阻害場面**：男子2.21%、女子4.65%となっており、女子が有意に高い ( $\chi^2=49.41$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。内容をみると、**E'-m** 反応がそのカテゴリー内で高く、男女ともに23.02%であるが、女子が有意に高い ( $\chi^2=11.38$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。 **E'-M** 反応は、男子13.49%、女子21.51%となり、女子が有意に高い ( $\chi^2=21.62$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。女子は、欲求不満に対して言葉を吐いた後、時の経過を待つて解決しようとするのが窺われる。**E** を含む反応は見られない。

c) **超自我阻害場面**：男子1.06%、女子2.46%と女子の方が倍近く高くなっており、女子が有意に高い ( $\chi^2=16.00$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。内容をみると、そのカテゴリー内で高いものは、男子 **E-I** 反応が、33.33%、次いで **E-I'**、**e-I'** 反応が、それぞれ16.67%と同じで、女子は **e-I'** 反応が18.57%、次いで、**E-I** 反応が17.14%である。**E'** を含む反応は全く見られない。この場面では、一言欲求不満に対して言葉を吐いた後、自分が悪かったことを認めようとする姿が窺われる。有意差がみられたのは **E-I** 反応であり、女子が有意に高い ( $\chi^2=5.40$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。

#### 4) カテゴリーが3つ以上の組み合わせ評点

a) 場面全体：頻度は極めて低いが、参考述べてと、全体の0.25%で、男子0.05%、女子0.2%であり、女子が有意に高い ( $\chi^2=8.04$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。

b) 自我阻害場面：頻度が極めて低いが、参考述べてと以下ようになる。男子0.07%、女子0.23%となっており、女子が有意に高い ( $\chi^2=4.76$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。反応内容をみると、男子は E'-e-m 反応が50%、E'-M-m、i-M-m 反応が各々 25%であり、障害優位型を含む傾向がある。女子は i-M-m 反応が30.77%、E'-e-m、E'-M-m 反応が各々 23.08%であり、自己防衛型を含む傾向がある。

c) 超自我阻害場面：男子0%、女子0.14%となっている。内容をみると、男子は全く反応がない。女子は l'-l-i、E-l'-l、E-l'-i 反応が出ており、自己防衛型を含む傾向がある。

## 考 察

### I. 攻撃的言語反応に現れた男女差

#### (1) 全体的傾向について

言語的攻撃反応について、本結果から提示された男女差についての諸知見をまとめるに際して、まず、本調査対象者の全体的な傾向を確認しておきたい。「対応を迫られている人が答えると思われる言葉 (あなた自身の気持ち)」からではなく、「どのような対応が望ましいと思うか」、というP-Fスタディのオリジナル版を改変させた教示にもとづいて回答させた結果、男女とも、その教示に沿った「望ましい反応」をとることができている。本対象者らが示している「望ましい反応」とは次のようなものであった。まず、「自我阻害場面」では「無罰的方向・自己防衛型」、つまり、障害は明らかに生じているが、その責任の所在が自分と相手のどちらにあるのか明白でない時には、自分もしくは相手のどちらに対しても攻撃を向けない。自他の責任を問うことをせずに、欲求不満場面自体を曖昧にし、うまくごまかしてしまうのが望ましい対応だと考えていると推察される。さらに、「超自我阻害場面」においては「内罰的方向・自己防衛型」、つまり、欲求不満を起こした原因を自分自身に帰着させ、自分の責任を認めようとする反応を示している。明らかに自己の責任を問われているのが「超自我阻害場面」であり、自己の責任を認め、謝ることが望ましいと考えていることがわかる。これらの結果は、「欲求不満場面に出合ったときにとるべき社会的に望ましい対応」を本調査対象者の青年男女ができることを示している。教示による働きかけによって、攻撃的な言語反応を抑制できる可能性が示唆される。

そうした中で、やはり、男子は外罰的方向において、女子は内罰的・無罰的方向においてそれぞれ反応率が高いという結果は、攻撃的な言語反応を抑制しつつも、P-Fテストのオリジナル版で指摘されているとおりの男女差が現れている。このことは、攻撃性の社会的表象が従前のまま依然として存在し、社会や人びとに対して強い影響をもっていることを証拠立てるものであろう。

## (2) 具体的な反応における男女差

### 1) 外罰的方向

「超自我阻害場面」においては、男子は相手に責任を押しつけ、女子は自分には責任がないとする傾向がみられた。自己に責任があるにもかかわらず、それを否定する態度は男女とも変わりはないのだが、その攻撃を向けるやり方に違いが認められた。そのやり方には、「どうしてくれるんだ」と相手に気持ちをぶついたり、解決方法を求めたり、「私は間違っていない」といった自己の正当性を強調するなどがあるが、本対象者の男子は、直接相手に攻撃を向ける「直接的攻撃反応」を、女子は、直接相手を非難するよりも、自分の非を否定することを通して相手に責任を向けるという、いわば「間接的、婉曲的な攻撃反応」をとることがわかった。今回の調査結果は、「男子に攻撃性が高い」とする社会的表象を裏づけるものである。男子の方が、攻撃を相手に明確に向けるということが再確認された結果である。「自我阻害場面」、「超自我阻害場面」のどちらにおいても、男子に高い形で有意差が認められたということは、責任が自分自身にあることがわかっていようと、どちらに責任があるのか決められない場合であろうと、いずれの状況にあっても、ともかく相手に攻撃的な対応をとることが、男子自身にとっては「望ましい対応」であると認知されているということである。

### 2) 内罰的方向

「自我阻害場面」では、男女差はあまりなかったが、「超自我阻害場面」においては有意差がみられた。女子は自らの責任を認めるが、その認め方に特徴がある。言い訳や弁解といった表現を伴わせる傾向である。自分の過ちを認める一方で、「私はこう思っていたのに」「その時はこういう事情だったから」といった弁解をし、相手に自分を理解してほしいという気持ちを強くにじませるような反応が目立つ。それに対して、男子は「言い訳をする」よりも、原因が相手にあるのか、自己にあるのかをはっきりさせることが望ましいと考えているようである。

### 3) 無罰的方向

「自我阻害場面」において、女子は、生じた欲求不満を「不可避的なことであり、相手のせいでも自分のせいでもなかった」とする対応が望ましいと考えているようである。男子は、外罰的の反応が高い分、この種の反応が低かったものと思われる。「超自我阻害場面」は、自己に責任があることがはっきりしている場面であるから、それを無視したり、はぐらかすことは望ましくないはずであり、男女ともに低い割合となったのだろう。また、男子は、時の経過に解決を委ねる反応において女子より有意に高かった。このことから、やはり男子は、責任を負いたくないという気持ちの強いことが読み取れる。

### 4) 組み合わせ反応

組み合わせの反応が女子に多くみられた。外罰的方向を含む組み合わせ反応が多かったことからみても、女子は、欲求不満に対して、単純で明快な形で対応するよりも、より複雑で込み入った対応をとるようだ。自分が抱えている感情を素直に表現して攻撃を外へ向けはするが、相手を

気遣ったり、思いやる気持ちも同時に表現する傾向がみられる。そうすることで相手と自分の間に対立関係が生じないように、人間関係が後味の悪いものにならないようにする配慮や工夫がなされているように思われる。この結果は、ジェンダー・バイアスに関わる社会的表象のひとつである「言語能力における女子の優位性」を支持するものでもある。他の人との関係や家族の関係をづくりあげ、それらの人たちの関係を調整し、維持する役割が女性に期待されている（女性役割）ことが、このような反応にも如実に現れているとみることができるだろう。

## Ⅱ. 社会的表象としての攻撃性再考に向けて

問題で述べたように、P-Fスタディのオリジナル版では、青年男女に明確な反応差のあることがわかっている。通常の教示ではなく、「望ましいと思われる言葉で回答する」ように改変した教示を行った今回の調査結果では、全体的な傾向としては、男女ともに教示に沿って「攻撃的な言語反応」を抑制することが可能であった。攻撃的反応を抑制するよう要請した場合には、男女とも「社会的に望ましい対応」ととれるということである。そうした中で、男女を比較した分析結果では、やはりかなり明瞭な差が認められたのである。このことは、「社会的に望ましい反応」という意味が、男女で異なっていることを指し示している。攻撃的言語反応を抑制することにおいて、「男としての望ましい抑制」と「女としての望ましい抑制」があるということである。この違いは、攻撃的な言語反応の量的な違いに止まらず、反応の内容においてより明確であった。この事実は、攻撃性の表象には二重構造が内包され、それが人びとに共有されていることを意味している。一般に言われている男女差が、顕在化された身体的・物理的な行動、あるいは、言語的な表現反応においてだけでなく、社会常識からみれば、攻撃的反応自体を抑止することを意味するはずの「望ましい」反応においてさえも、男女間で異なっているということを再認識させるものである。先に述べた「男子に攻撃性が容認されている」という事実が本研究でも確認されたといえる。

このようなジェンダー・バイアスを内包した攻撃性の社会的表象を再考し、それを解消するためには、長い間定着してきた社会的表象としての攻撃性のあり方を根本的に問い直すことが必要である。そのための理論的手だては何か。どのような視点、枠組みが必要か。そのひとつとして、攻撃性がわれわれの社会においてどのように認識され、発達のどのように位置づけられているかを再検討し、女性だけでなく、個々の男性の心と体の発達に与えているであろう影響をつぶさに検証する作業が急務であろう。

現代社会はまだまだ男性中心社会であり、人間とは男性を意味する。男子が「男らしさ」を学習していく過程が、そのまま、われわれの社会における発達や教育の目標であることは、多くの研究が既に指摘している通りである。社会的な主導権を握り、優位な立場に立つことが求められている「男性」にとっては、現代社会で重要とされる能力や特性において「女性」よりも勝っているのを示すことは、己らの立場の正当性と存在価値を自他共に確認するのに非常に有利であろう。男子に望まれている資質や条件が理想の人間像のそれと重なりあっている限り、ジェンダー差を最大限利用しようとする社会的仕組みはそう簡単には揺るがないだろう。「人生の勝者」になるための有力な戦略に、高い攻撃的能力と特性が必要とされているのである。「攻撃性」という社

会表象と「男性性」という表象は、「望ましい男性の発達像」という形で深く重なり合っているのである。社会表象としての攻撃性を問い直すこととは、そのまま、社会表象としての「男性性」そのものを問い直すことにほかならない。

男女差の多くは、社会が、ジェンダー・イデオロギーが作り上げたものである。このからくりを読み解き、性差神話や母性神話の出所とその特質、さらにはそれがどのように社会的に作用しているのかを丹念に突き止めていくことが求められる。ジェンダーにつきまとう偏見や差別について論じる上で肝要なのは、男女差の科学的事実についてだけではなく、それが人びとにどう捉えられ、どうわれわれの社会に位置づけられているか、即ち、社会的表象としての「ジェンダー」、さらには「男性性」「女性性」という表象の特質や中身を再吟味し、再検討することである。

## 注

- 1) GCR (Group Conformity Rating) とは、集団への順応度を意味し、どの程度世間一般の常識的な方法で反応できるかを示す指標である。

## 〈引用・参考文献〉

- ・青野篤子・森永康子・土肥伊都子 (1999/2004) 『ジェンダーの心理学－男女の思い込みを科学する』 ミネルヴァ書房。
- ・Askew, S. & Ross, C. (1988) *Boys don't cry. Boys and sexism in education*. Open University Press. (堀内かおる訳, 1997 『男の子は泣かない－学校でつくられる男らしさとジェンダー差別解消プログラム』 金子書房)
- ・Bem, S. L. (1993) *The Lenses of gender: Transforming the debate on sexual inequity*. Yale University Press. (福富護訳, 1999 『ジェンダーのレンズ－性の不平等と人間性発達』 川島書店)
- ・長谷川真理子 (2001) 『雄と雌の数をめぐる不思議』 中央公論新社。
- ・Hrdy, S. B. (1999) *Mother nature: A history of mothers, infants, and natural selection*. Pantheon Books. (塩浦通緒訳, 2005 『マザー・ネイチャー－「母親」はいかにヒトを進化させたか 上・下』 早川書房)
- ・Hyde, J. S. (1981) How large are cognitive gender differences? A meta-analysis using  $w^2$  and  $d$ . *American Psychologist*, 36, 892-901.
- ・伊藤公雄 (1993) 『男らしさのゆくえ－男性文化の文化社会学』 新曜社。
- ・伊藤公雄 (1996) 『男性学入門』 作品社。
- ・柏木恵子・高橋恵子 (編著) (1995) 『発達心理学とフェミニズム』 ミネルヴァ書房。
- ・Krahé, B. (2001) *The social psychology of aggression*. Psychology Press. (秦一士・湯川進太郎 編訳, 2004 『攻撃の心理学』 北大路書房)
- ・Maccoby, E. E. & Jacklin, C. N. (1974) *The Psychology of sex differences*. Stanford University Press.
- ・Moscovici, S. (2001) *Social representations; Explorations in social psychology*. New York University Press, Washington Square, New York.
- ・Pinker, S. (2008) *The Sexual paradox: Men, women, and real gender gap*. New York; Scribner (幾島幸子・古賀祥子訳, 2009 『なぜ女は昇進を拒むのか－進化心理学が解く性差のパラドクス』 早川書房)
- ・Rosenzweig, S. (1978) *Aggressive behavior and the Rosenzweig picture-frustration (P-F) study*. New York, Praeger.

- (秦一士訳, 2006『S.ローゼンツァイク・攻撃行動とP-Fスタディ』北大路書房)
- ・住田勝美・林勝造・一谷彊 (編著) (1964)『ローゼンツァイク・人格理論』三京房.
  - ・住田勝美・林勝造・一谷彊 (編著) (1964/1973)『ローゼンツァイク・改訂版 P-Fスタディ使用手引』三京房.
  - ・鈴木淳子・柏木恵子 (2006)『ジェンダーの心理学—心と行動への新しい視座』(心理学の世界 専門編5) 培風館.
  - ・多賀太 (2006)『男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース』世界思想社.
  - ・高橋恵子・湯川隆子 (2008)「第2章 ジェンダー意識の発達—男らしさもつくられる」柏木恵子・高橋恵子 (編著)『日本の男性の心理学—もう一つのジェンダー問題』(pp.53-73), 有斐閣.
  - ・渡辺恒夫 (1986)『脱男性の時代—アンドロジナスをめざす文明学』勁草書房.
  - ・矢守克也 (1994) 社会的表象としてのメンタルマップに関する研究, 実験社会心理学研究, Vol.34(1), 69-81.
  - ・矢守克也 (2001) 社会的表象理論と社会構成主義—W.Wagnerの見解をめぐって—, 実験社会心理学研究, Vol.40(1), 95-114.
  - ・湯川隆子 (2006)「フェミニスト心理学の目標達成のために—今後の課題と展望」青野篤子・湯川隆子 (編著)『フェミニスト心理学をめざして』(pp. 144-158), かもがわ出版.

追記: 本論文は、筆者収集のデータにもとづき、指導、作成された卒業論文 (藤原綾子・三重大学・教育学部) の分析結果の一部を用いて新たに書き起こされたものである。

## Summary

It has been widely believed that males are more aggressive than females. The aim was to re-examine the gender difference of aggressive verbal behavior by Rosenzweig Picture-Frustration Study (P-FS), which is a semi-projective technique to assess patterns of aggressive responding. Participants were college students (174 males and 182 females). The original P-FS was revised on 2 points. First, the instruction for responding to the 24 frustrating situations was changed from "in terms of your own feelings" to "in terms of social desirability". Second, the presentation of 24 situations was changed from "cartoon-like pictures" to "verbal speech only". The data was analyzed according to "The Translated Japanese Manual of Revised P-F Study". Each response of all participants was classified into one of nine categories (three directions of aggression × three types of aggression). A frequency of each category was calculated. Main results were as follows. (1) Both of male and female students could make socially desirable responses, i.e., "Inaggressive responses" in accordance with the instruction. (2) As for the direction of aggression, male students were significantly more "Extraggessive" than female students. In contrast, female students were significantly more "Inaggressive" than male students. Furthermore, female students made combined responses of "Intraggession" and "Ego-defense", that is, they tended to apologize and make excuses. Overall, although the instruction to control aggressive verbal responses to the frustrative situations had an effect on both of male and female students, male students were still more aggressive.

表1-1 改変されたP-Fスタディの24場面

- 「場面1」：服にはねをかけてしまって本当にすみません。できるだけ水だまりをよけて通ろうとしたんですが…。
- 「場面2\*」：あら、大変だわ！あなたが今割ったのは母が大切にしていた花瓶なんですよ。
- 「場面3」：前の人の帽子が邪魔になって見えにくいでしょう？
- 「場面4」：折角送って来たんですが、車の故障で汽車に間に合わず申し訳ありません。
- 「場面5\*」：つい一週間前に買ったまっさらの時計ですのに、これで三べんも直しに来ているんですよ。いつでも家に帰るとすぐ止まってしまうんですわ。
- 「場面6」：四冊も持っておられるけれども図書館の規則では一回に二冊しか持ち出しを許されていないのですが…。
- 「場面7\*」：でもね、それはちょっと言い過ぎじゃありませんか？
- 「場面8」：君の女友達が明日の遠足の仲間に僕を招待してくれたよ。彼女は君が行く事にはなっていないといていたがね。
- 「場面9」：これから旅にお出かけでレインコートが入用とは思いますが、主人が午後でないと帰ってきませんので私ではお出しするわけにはゆきません。
- 「場面10\*」：君は嘘つきだ。君にはそれがわかっているはずだ。
- 「場面11」：すみません。交換手が電話番号を間違えたものですから…。
- 「場面12」：この帽子があなたのものでないとすると、あの男が間違っただけあなたの帽子をかぶって帰り、代わりに自分の帽子を置いていったに違いありません。
- 「場面13」：昨日約束をしましたが、今朝はお会いしている暇がないんです。
- 「場面14」：あの人は10分前にここへ来ていなくてはならないはずなんです…。
- 「場面15」：本当にすみません。私がこんな失敗さえしなかったらあなたのすばらしい腕前で私達の組が勝っていたでしょうに。
- 「場面16\*」：君が無理に追い抜こうとしたのが間違いだよ。
- 「場面17\*」：まあ！鍵をなくしたの？困ったわね、中に入れないわ！
- 「場面18」：すみません。一つだけ残っていたのも、たった今売り切ってしまいました。
- 「場面19\*」：学校の前だというのに、時速60キロも出したりして一体どこへ行くつもりですか？
- 「場面20」：あの人が私達を招待しなかったのは変だわ！
- 「場面21\*」：あなた達はあの人のことをそんなに悪く言っていますが、昨日災難にあって今は病院に入っているんですよ。
- 「場面22」：お怪我はありませんでしたか？
- 「場面23」：叔母さんからですの。ここでもう一度お別れがしたいから暫く待っていてほしいと聞いていますが、困ったわね！
- 「場面24」：お貸して頂いた新聞をお返しします。赤ん坊が破ってしましましてすみません。

\*超自我阻害場面（8場面）

表1-2 評点因子一覧

型 方向	障害優位型 (O-D) 障害の指摘に関係する 内容を強く持つ反応	自己防衛型 (E-D) 自我の強調に関係する 内容を強く持つ反応	要求固執型 (N-P) 問題の解決に関係する 内容を強く持つ反応
外罰的 (E) 攻撃が外に 向けられるもの	<b>E'</b> (外罰方向障害優位型の反応) 欲求不満を起こさせた障害を強く指摘、表明するもの。 多くの場合、欲求不満をきたした事の失望とそれに伴う不満を強く外に向ける形をとり、単に「チエツ」「なんだつまらん」といった反応語も含む。	<b>E</b> (外罰方向自己防衛型の反応) とがめ、敵意を外に向け、自我を強調する反応。 <b>E</b> (Eの変形で超自我因子と呼ばれる) 負わされた罪に責任のある事を攻撃的に否認する反応。多く超自我阻害場面に出る。	<b>e</b> (外罰方向要求固執型の反応) 解決をはかるために他の人に向かって依存したり、援助を求めたりある時には庇護を求めたりする反応。
内罰的 (I) 攻撃が内に 向けられるもの	<b>I'</b> (内罰方向障害優位型の反応) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は内に向けられる。 多くの場合失望を外に表さず不満を抑えて表明しない。内にもなる形をとる。外から見ると欲求不満の存在の否定と思われるような反応である。 従って失望や不満を抱いている事を外に表さないためにかえって障害の存在が自分にとっては有益なものであるといった形の反応語もこれであるし、他の人に欲求不満を引き起こさせ、そのために大変驚き当惑を示すような反応もこれに入る。	<b>I</b> (内罰方向自己防衛型の反応) とがめ、非難が自分自身に向けられ、自責自己非難の形をとるもの。 <b>I</b> (Iの変形で超自我因子と呼ばれる) 一応自分の罪は認めるが、避け得なかった環境に言及して本質的には失敗を認めない反応。多くは言訳の形をとる。	<b>i</b> (内罰方向要求固執型の反応) 解決をはかるために自分自ら努力をしたり、あるいは罪障感から賠償とか罪滅ぼしを申し出たりする反応。
無罰的 (M) 内にも外にも 向けずうまく はぐらかすもの	<b>M'</b> (無罰方向障害優位型の反応) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は最小限度にとどめられ、内にも外にも攻撃を向けないもの。	<b>M</b> (無罰方向自己防衛型の反応) 欲求不満を引き起こした事に対する非難を全く回避し、ある時にはその場面は不可避免的なものとみなして、欲求不満を起こさせた人物をも許すごとき反応。	<b>m</b> (無罰方向要求固執型の反応) 時の経過に問題の解決を委ねる反応で、忍耐するとか、規則習慣に従うとかの形をとる。

注) 住田・林・一谷 (1964 / 1973) より転載

表2 9 カテゴリー毎の出現頻度（人数）

## &lt; 自我阻害場面 &gt;

	人数			割合		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
E'	14	11	14	13.08%	11.34%	12.25%
E	14	12	14	13.08%	12.37%	12.75%
e	12	11	12	11.21%	11.34%	11.27%
I'	6	6	6	5.61%	6.19%	5.88%
I	10	11	11	9.35%	11.34%	10.29%
i	10	8	10	9.35%	8.25%	8.82%
M'	11	11	11	10.28%	11.34%	10.78%
M	15	15	15	14.02%	15.46%	14.71%
m	15	12	15	14.02%	12.37%	13.24%
合計	107	97	108	100%	100%	99.99%

## &lt; 超自我阻害場面 &gt;

	人数			割合		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体
E'	1	1	1	2.63%	2.86%	2.82%
E	8	6	8	21.05%	17.14%	16.90%
e	3	2	3	7.89%	5.71%	7.04%
I'	6	6	6	15.79%	17.14%	16.90%
I	8	8	8	21.05%	22.86%	22.54%
i	8	7	8	21.05%	20.00%	21.13%
M'	0	0	0	0%	0%	0%
M	2	3	3	5.26%	8.57%	7.04%
m	2	2	2	5.26%	5.71%	5.63%
合計	38	35	39	99.98%	99.99%	100%

表3 攻撃の方向別による総反応数（自我阻害場面+超自我阻害場面）

<外罰的方向>

	人数（自我+超自我）		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	201	150	4.80%	3.45%	2.35%	1.76%
E	374	226	8.92%	5.19%	4.38%	2.65%
<u>E</u>	93	83	2.22%	1.91%	1.09%	0.97%
e	186	134	4.44%	3.08%	2.18%	1.57%
E'-E	3	8	0.07%	0.18%	0.04%	0.09%
E'-e	27	26	0.64%	0.60%	0.32%	0.30%
E-e	3	1	0.07%	0.02%	0.04%	0.01%
<u>E</u> -E	1	0	0.02%	0%	0.01%	0%
合計	888	628	21.19%	14.43%	10.39%	7.35%

<内罰的方向>

	人数（自我+超自我）		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
I'	291	322	6.94%	7.40%	3.41%	3.77%
I	328	301	7.83%	6.92%	3.84%	3.52%
<u>I</u>	192	273	4.58%	6.27%	2.25%	3.20%
i	303	273	7.23%	6.27%	3.55%	3.20%
I'-I	1	13	0.02%	0.30%	0.01%	0.15%
I'- <u>I</u>	3	16	0.07%	0.37%	0.04%	0.19%
I'-i	33	82	0.79%	1.88%	0.39%	0.96%
I- <u>I</u>	1	0	0.02%	0%	0.01%	0%
I-i	134	244	3.20%	5.61%	1.57%	2.86%
<u>I</u> -i	22	61	0.52%	1.40%	0.26%	0.71%
I'-I-i	0	2	0%	0.05%	0%	0.02%
合計	1308	1587	31.21%	36.47%	15.31%	18.58%

<無罰的方向>

	人数（自我+超自我）		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
M'	301	320	7.18%	7.35%	3.52%	3.75%
M	630	734	15.03%	16.87%	7.37%	8.59%
m	320	332	7.64%	7.63%	3.75%	3.89%
M'-M	6	10	0.14%	0.23%	0.07%	0.12%
M'-m	8	14	0.19%	0.32%	0.09%	0.16%
M-m	53	92	1.26%	2.11%	0.62%	1.08%
合計	1318	1502	31.45%	34.51%	15.43%	17.58%

表4 攻撃の方向別による総反応数（自我阻害場面）

## &lt;外罰的方向&gt;

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	201	149	7.18%	5.13%	3.52%	2.61%
E	170	132	6.07%	4.55%	2.98%	2.31%
<u>E</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
e	144	112	5.14%	3.86%	2.52%	1.96%
E'-E	3	8	0.11%	0.28%	0.05%	0.14%
E'-e	27	25	0.96%	0.86%	0.47%	0.44%
E-e	3	1	0.11%	0.03%	0.05%	0.02%
<u>E</u> -E	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	548	427	19.58%	14.70%	9.61%	7.49%

## &lt;内罰的方向&gt;

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
I'	159	175	5.68%	6.03%	2.79%	3.07%
I	55	42	1.96%	1.45%	0.96%	0.74%
<u>I</u>	32	48	1.14%	1.65%	0.56%	0.84%
i	159	171	5.68%	5.89%	2.79%	3.00%
I'-I	0	0	0%	0%	0%	0%
I'- <u>I</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
I'-i	0	1	0%	0.03%	0%	0.02%
I- <u>I</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
I-i	10	21	0.36%	0.72%	0.18%	0.37%
<u>I</u> -i	11	27	0.39%	0.93%	0.19%	0.47%
I'-I-i	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	426	485	15.22%	16.70%	7.47%	8.50%

## &lt;無罰的方向&gt;

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
M'	301	320	10.75%	11.02%	5.28%	5.61%
M	615	706	21.97%	24.31%	10.78%	12.38%
m	302	326	10.79%	11.23%	5.30%	5.72%
M'-M	6	10	0.21%	0.34%	0.11%	0.18%
M'-m	8	14	0.29%	0.48%	0.14%	0.25%
M-m	53	92	1.89%	3.17%	0.93%	1.61%
合計	1285	1468	45.91%	50.55%	22.53%	25.74%

表5 攻撃の方向別による各項目の反応数（自我阻害場面）

<外罰的方向>

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	201	149	36.68%	34.89%	20.62%	15.28%
E	170	132	31.02%	30.91%	17.44%	13.54%
<u>E</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
e	144	112	26.28%	26.23%	14.77%	11.49%
E' - E	3	8	0.55%	1.87%	0.31%	0.82%
E' - e	27	25	4.93%	5.85%	2.77%	2.56%
E - e	3	1	0.55%	0.23%	0.31%	0.10%
<u>E</u> - E	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	548	427	100%	100%	56.21%	43.79%

<内罰的方向>

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
I'	159	175	37.32%	36.08%	17.45%	19.21%
I	55	42	12.91%	8.66%	6.04%	4.61%
<u>I</u>	32	48	7.51%	9.90%	3.51%	5.27%
i	159	171	37.32%	35.26%	17.45%	18.77%
I' - I	0	0	0%	0%	0%	0%
I' - <u>I</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
I' - i	0	1	0%	0.21%	0%	0.11%
I - <u>I</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
I - i	10	21	2.35%	4.33%	1.10%	2.31%
<u>I</u> - i	11	27	2.58%	5.57%	1.21%	2.96%
I' - I - i	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	426	485	100%	100%	46.76%	53.24%

<無罰的方向>

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
M'	301	320	23.42%	21.80%	10.93%	11.62%
M	615	706	47.86%	48.09%	22.34%	25.64%
m	302	326	23.50%	22.21%	10.97%	11.84%
M' - M	6	10	0.47%	0.68%	0.22%	0.36%
M' - m	8	14	0.62%	0.95%	0.29%	0.51%
M - m	53	92	4.12%	6.27%	1.93%	3.34%
合計	1285	1468	100%	100%	46.68%	53.32%

表6 攻撃の方向別による総反応数（超自我阻害場面）

## &lt;外罰的方向&gt;

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	0	1	0%	0.07%	0%	0.04%
E	204	94	14.66%	6.49%	7.18%	3.31%
<u>E</u>	93	83	6.68%	5.73%	3.27%	2.92%
e	42	22	3.02%	1.52%	1.48%	0.77%
E'-E	0	0	0%	0%	0%	0%
E'-e	0	1	0%	0.07%	0%	0.04%
E-e	0	0	0%	0%	0%	0%
<u>E</u> -E	1	0	0.07%	0%	0.04%	0%
合計	340	201	24.43%	13.88%	11.97%	7.08%

## &lt;内罰的方向&gt;

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
I'	132	147	9.48%	10.15%	4.65%	5.18%
I	273	259	19.61%	17.89%	9.61%	9.12%
<u>I</u>	160	225	11.49%	15.54%	5.63%	7.92%
i	144	102	10.34%	7.04%	5.07%	3.59%
I'-I	1	13	0.07%	0.90%	0.04%	0.46%
I'- <u>I</u>	3	16	0.22%	1.10%	0.11%	0.56%
I'-i	33	81	2.37%	5.59%	1.16%	2.85%
I- <u>I</u>	1	0	0.07%	0%	0.04%	0%
I-i	124	223	8.91%	15.40%	4.37%	7.85%
<u>I</u> -i	11	34	0.79%	2.35%	0.39%	1.20%
I'-I-i	0	2	0%	0.14%	0%	0.07%
合計	882	1102	63.36%	76.10%	31.06%	38.80%

## &lt;無罰的方向&gt;

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
M'	0	0	0%	0%	0%	0%
M	15	28	1.08%	1.93%	0.53%	0.99%
m	18	6	1.29%	0.41%	0.63%	0.21%
M'-M	0	0	0%	0%	0%	0%
M'-m	0	0	0%	0%	0%	0%
M-m	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	33	34	2.37%	2.35%	1.16%	1.20%

表7 攻撃の方向別による各項目の反応数（超自我阻害場面）

<外罰的方向>

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	0	1	0%	0.50%	0%	0.18%
E	204	94	60.00%	46.77%	37.71%	17.38%
<u>E</u>	93	83	27.35%	41.29%	17.19%	15.34%
e	42	22	12.35%	10.95%	7.76%	4.07%
E' - E	0	0	0%	0%	0%	0%
E' - e	0	1	0%	0.50%	0%	0.18%
E - e	0	0	0%	0%	0%	0%
<u>E</u> - E	1	0	0.29%	0%	0.18%	0%
合計	340	201	100%	100%	62.85%	37.15%

<内罰的方向>

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
I'	132	147	14.97%	13.34%	6.65%	7.41%
I	273	259	30.95%	23.50%	13.76%	13.05%
<u>I</u>	160	225	18.14%	20.42%	8.06%	11.34%
i	144	102	16.33%	9.26%	7.26%	5.14%
I' - I	1	13	0.11%	1.18%	0.05%	0.66%
I' - <u>I</u>	3	16	0.34%	1.45%	0.15%	0.81%
I' - i	33	81	3.74%	7.35%	1.66%	4.08%
I - <u>I</u>	1	0	0.11%	0%	0.05%	0%
I - i	124	223	14.06%	20.24%	6.25%	11.24%
<u>I</u> - i	11	34	1.25%	3.09%	0.55%	1.71%
I' - I - i	0	2	0%	0.18%	0%	0.10%
合計	882	1102	100%	100%	44.46%	55.54%

<無罰的方向>

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
M'	0	0	0%	0%	0%	0%
M	15	28	45.45%	82.35%	22.39%	41.79%
m	18	6	54.55%	17.65%	26.87%	8.96%
M' - M	0	0	0%	0%	0%	0%
M' - m	0	0	0%	0%	0%	0%
M - m	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	33	34	100%	100%	49.25%	50.75%

表8 反応の型別による総反応数（自我阻害場面＋超自我阻害場面）

## &lt;障害優位型&gt;

	人数（自我＋超自我）		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	201	150	4.80%	3.45%	2.35%	1.76%
I'	291	322	6.94%	7.40%	3.41%	3.77%
M'	301	320	7.18%	7.35%	3.52%	3.75%
E' - M'	1	8	0.02%	0.18%	0.01%	0.09%
M' - I'	0	2	0%	0.05%	0%	0.02%
合計	794	802	18.95%	18.43%	9.29%	9.39%

## &lt;自己防衛型&gt;

	人数（自我＋超自我）		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E	374	226	8.92%	5.19%	4.38%	2.65%
<u>E</u>	93	83	2.22%	1.91%	1.09%	0.97%
I	328	301	7.83%	6.92%	3.84%	3.52%
<u>I</u>	192	273	4.58%	6.27%	2.25%	3.20%
M	630	734	15.03%	16.87%	7.37%	8.59%
E - I	11	10	0.26%	0.23%	0.13%	0.12%
E - M	18	18	0.43%	0.41%	0.21%	0.21%
I - M	8	8	0.19%	0.18%	0.09%	0.09%
合計	1654	1653	39.47%	37.98%	19.36%	19.35%

## &lt;要求固執型&gt;

	人数（自我＋超自我）		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
e	186	134	4.44%	3.08%	2.18%	1.57%
i	303	273	7.23%	6.27%	3.55%	3.20%
m	320	332	7.64%	7.63%	3.75%	3.89%
e - i	0	3	0%	0.07%	0%	0.04%
e - m	3	3	0.07%	0.07%	0.04%	0.04%
i - m	2	5	0.05%	0.11%	0.02%	0.06%
合計	814	750	19.42%	17.23%	9.53%	8.78%

表9 反応の型別による総反応数（自我阻害場面）

< 障害優位型 >

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	201	149	7.18%	5.13%	3.52%	2.61%
I'	159	175	5.68%	6.03%	2.79%	3.07%
M'	301	320	10.75%	11.02%	5.28%	5.61%
E' - M'	1	8	0.04%	0.28%	0.02%	0.14%
M' - I'	0	2	0%	0.07%	0%	0.04%
合計	662	654	23.65%	22.52%	11.61%	11.47%

< 自己防衛型 >

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E	170	132	6.07%	4.55%	2.98%	2.31%
<u>E</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
I	55	42	1.96%	1.45%	0.96%	0.74%
<u>I</u>	32	48	1.14%	1.65%	0.56%	0.84%
M	615	706	21.97%	24.31%	10.78%	12.38%
E - I	1	0	0.04%	0%	0.02%	0%
E - M	17	17	0.61%	0.59%	0.30%	0.30%
I - M	7	8	0.25%	0.28%	0.12%	0.14%
合計	897	953	32.05%	32.82%	15.73%	16.71%

< 要求固執型 >

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
e	144	112	5.14%	3.86%	2.52%	1.96%
i	159	171	5.68%	5.89%	2.79%	3.00%
m	302	326	10.79%	11.23%	5.30%	5.72%
e - i	0	0	0%	0%	0%	0%
e - m	3	3	0.11%	0.10%	0.05%	0.05%
i - m	2	5	0.07%	0.17%	0.04%	0.09%
合計	610	617	21.79%	21.25%	10.70%	10.82%

表 10 反応の型別による各項目の反応数（自我阻害場面）

## &lt;障害優位型&gt;

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	201	149	30.36%	22.78%	15.27%	11.32%
I'	159	175	24.02%	26.76%	12.08%	13.30%
M'	301	320	45.47%	48.93%	22.87%	24.32%
E' - M'	1	8	0.15%	1.22%	0.08%	0.61%
M' - I'	0	2	0%	0.31%	0%	0.15%
合計	662	654	100%	100%	50.30%	49.70%

## &lt;自己防衛型&gt;

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E	170	132	18.95%	13.85%	9.19%	7.14%
<u>E</u>	0	0	0%	0%	0%	0%
I	55	42	6.13%	4.41%	2.97%	2.27%
<u>I</u>	32	48	3.57%	5.04%	1.73%	2.59%
M	615	706	68.56%	74.08%	33.24%	38.16%
E - I	1	0	0.11%	0%	0.05%	0%
E - M	17	17	1.90%	1.78%	0.92%	0.92%
I - M	7	8	0.78%	0.84%	0.38%	0.43%
合計	897	953	100%	100%	48.49%	51.51%

## &lt;要求固執型&gt;

	自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
e	144	112	23.61%	18.15%	11.74%	9.13%
i	159	171	26.07%	27.71%	12.96%	13.94%
m	302	326	49.51%	52.84%	24.61%	26.57%
e - i	0	0	0%	0%	0%	0%
e - m	3	3	0.49%	0.49%	0.24%	0.24%
i - m	2	5	0.33%	0.81%	0.16%	0.41%
合計	610	617	100%	100%	49.71%	50.29%

表 11 反応の型別による総反応数（超自我阻害場面）

< 障害優位型 >

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	0	1	0%	0.07%	0%	0.04%
I'	132	147	9.48%	10.15%	4.65%	5.18%
M'	0	0	0%	0%	0%	0%
E' - M'	0	0	0%	0%	0%	0%
M' - I'	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	132	148	9.48%	10.22%	4.65%	5.21%

< 自己防衛型 >

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E	204	94	14.66%	6.49%	7.18%	3.31%
<u>E</u>	93	83	6.68%	5.73%	3.27%	2.92%
I	273	259	19.61%	17.89%	9.61%	9.12%
<u>I</u>	160	225	11.49%	15.54%	5.63%	7.92%
M	15	28	1.08%	1.93%	0.53%	0.99%
E - I	10	10	0.72%	0.69%	0.35%	0.35%
E - M	1	1	0.07%	0.07%	0.04%	0.04%
I - M	1	0	0.07%	0%	0.04%	0%
合計	757	700	54.38%	48.34%	26.65%	24.65%

< 要求固執型 >

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
e	42	22	3.02%	1.52%	1.48%	0.77%
i	144	102	10.34%	7.04%	5.07%	3.59%
m	18	6	1.29%	0.41%	0.63%	0.21%
e - i	0	3	0%	0.21%	0%	0.11%
e - m	0	0	0%	0%	0%	0%
i - m	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	204	133	14.66%	9.19%	7.18%	4.68%

表 12 反応の型別による各項目の反応数（超自我阻害場面）

## &lt;障害優位型&gt;

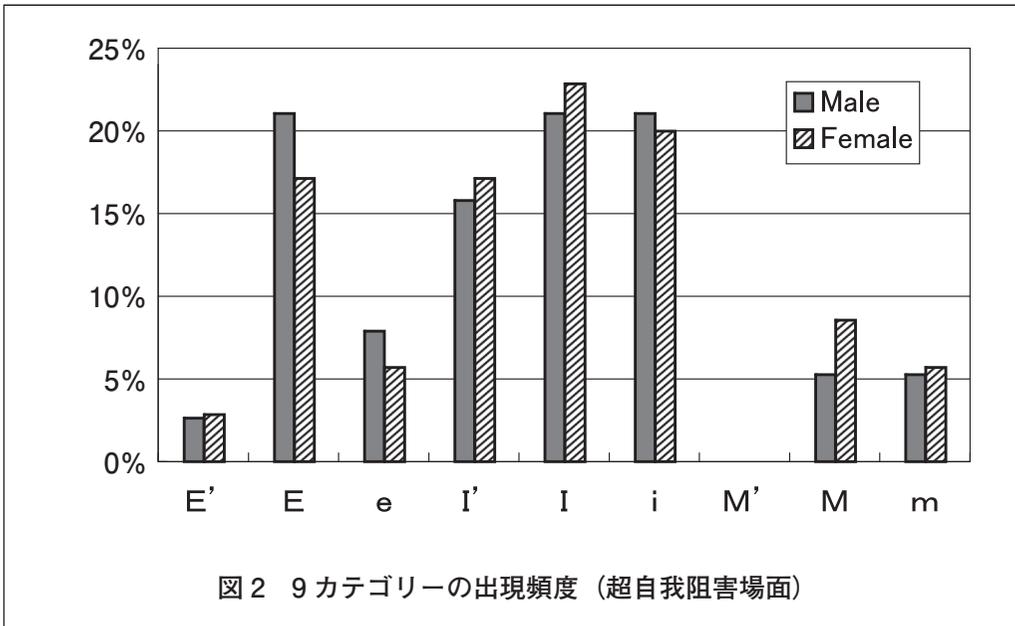
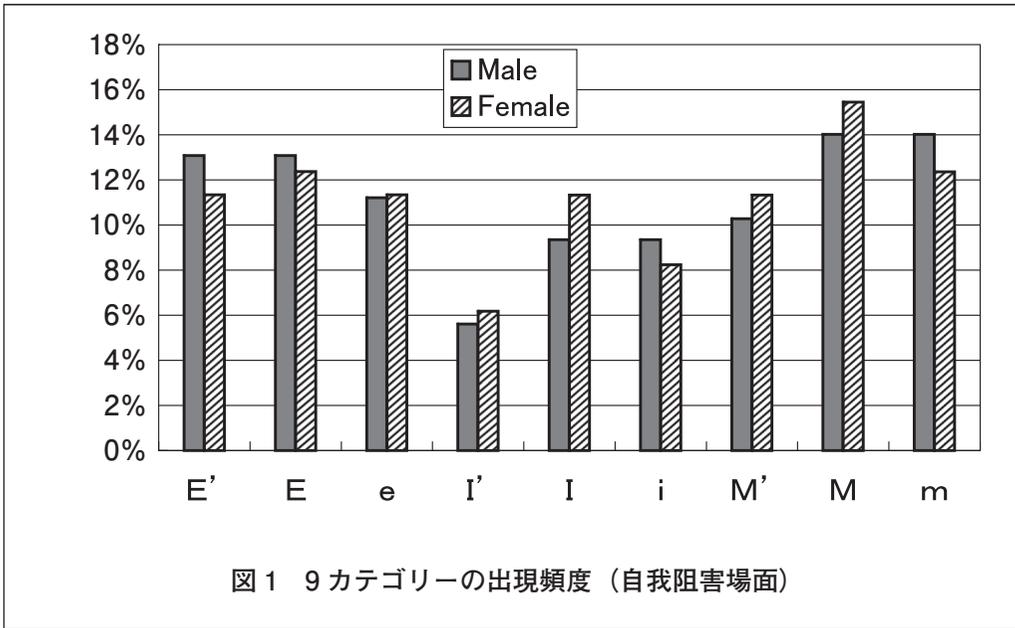
	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E'	0	1	0%	0.68%	0%	0.36%
I'	132	147	100%	99.32%	47.14%	52.50%
M'	0	0	0%	0%	0%	0%
E'-M'	0	0	0%	0%	0%	0%
M'-I'	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	132	148	100%	100%	47.14%	52.86%

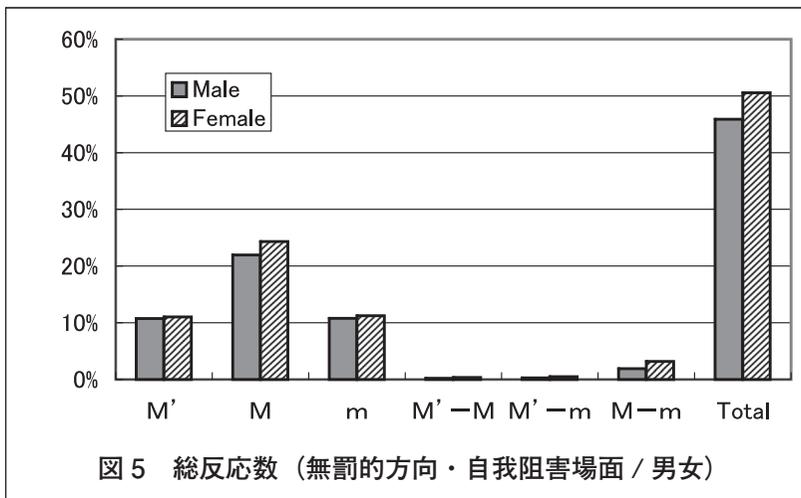
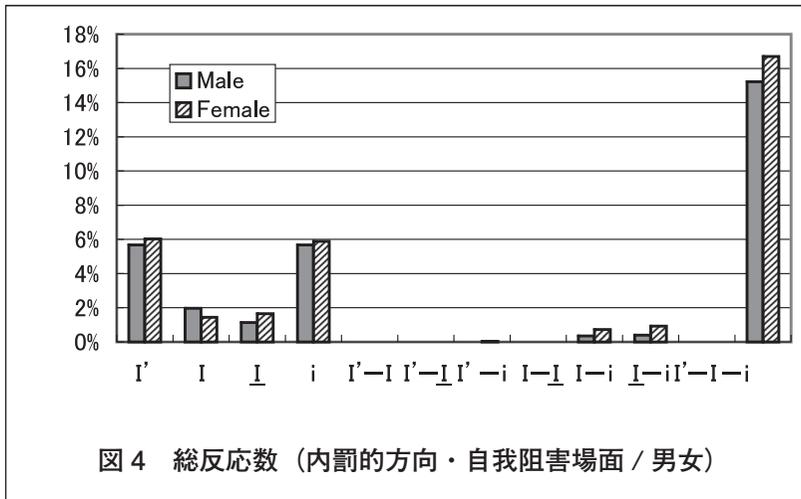
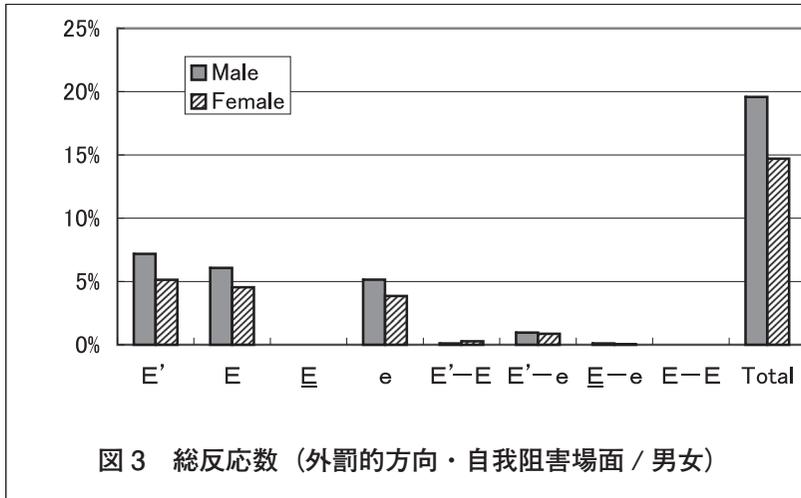
## &lt;自己防衛型&gt;

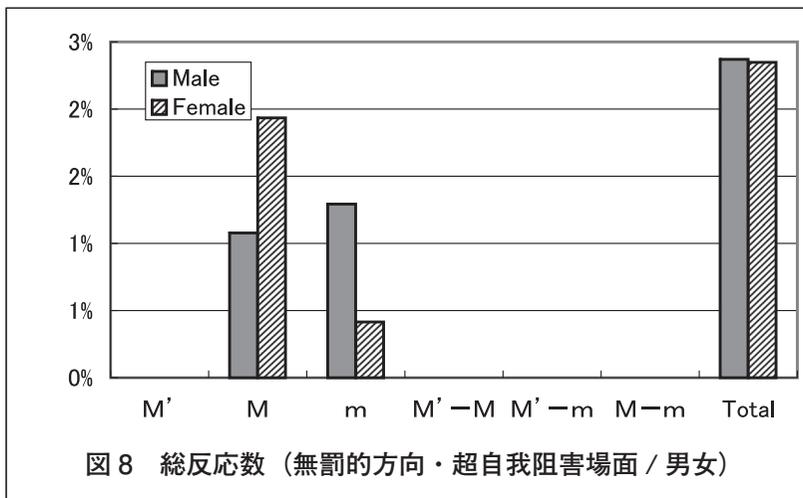
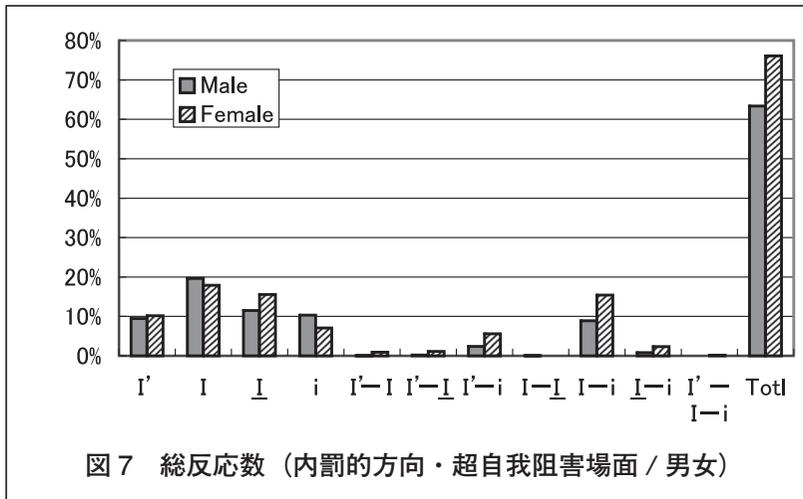
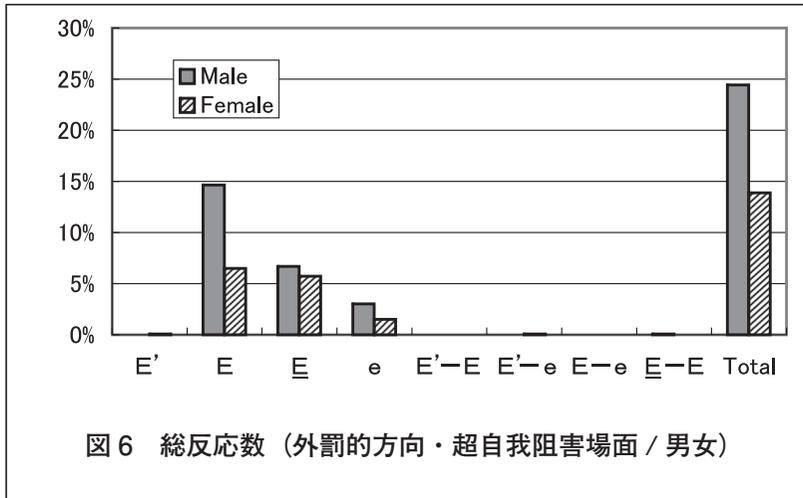
	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
E	204	94	26.95%	13.43%	14.00%	6.45%
<u>E</u>	93	83	12.29%	11.86%	6.38%	5.70%
I	273	259	36.06%	37.00%	18.74%	17.78%
<u>I</u>	160	225	21.14%	32.14%	10.98%	15.44%
M	15	28	1.98%	4.00%	1.03%	1.92%
E-I	10	10	1.32%	1.43%	0.69%	0.69%
E-M	1	1	0.13%	0.14%	0.07%	0.07%
I-M	1	0	0.13%	0%	0.07%	0%
合計	757	700	100%	100%	51.96%	48.04%

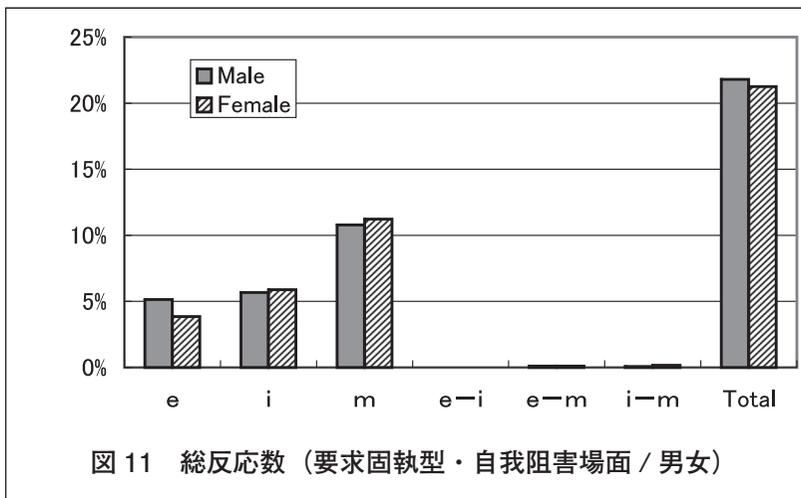
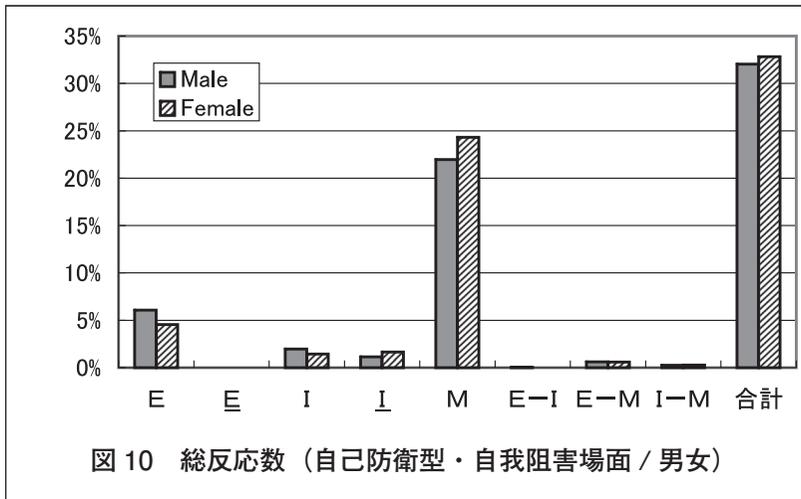
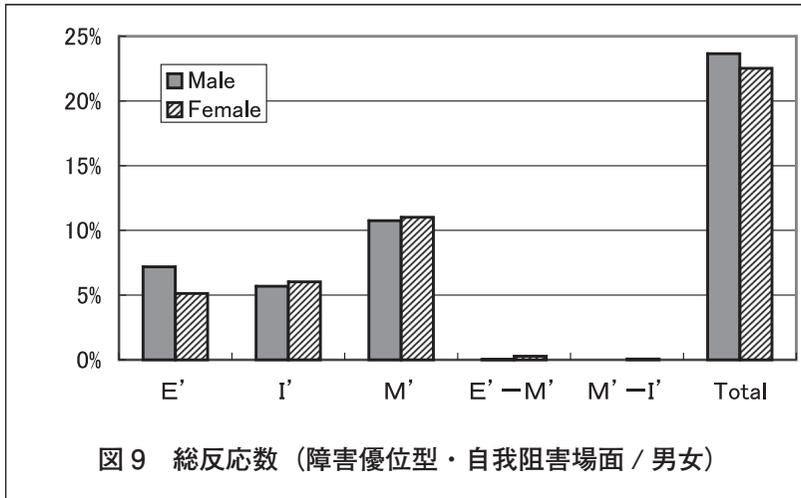
## &lt;要求固執型&gt;

	超自我					
	人数		割合（男女別）		割合（全体）	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
e	42	22	20.59%	16.54%	12.46%	6.53%
i	144	102	70.59%	76.69%	42.73%	30.27%
m	18	6	8.82%	4.51%	5.34%	1.78%
e-i	0	3	0%	2.26%	0%	0.89%
e-m	0	0	0%	0%	0%	0%
i-m	0	0	0%	0%	0%	0%
合計	204	133	100%	100%	60.53%	39.47%









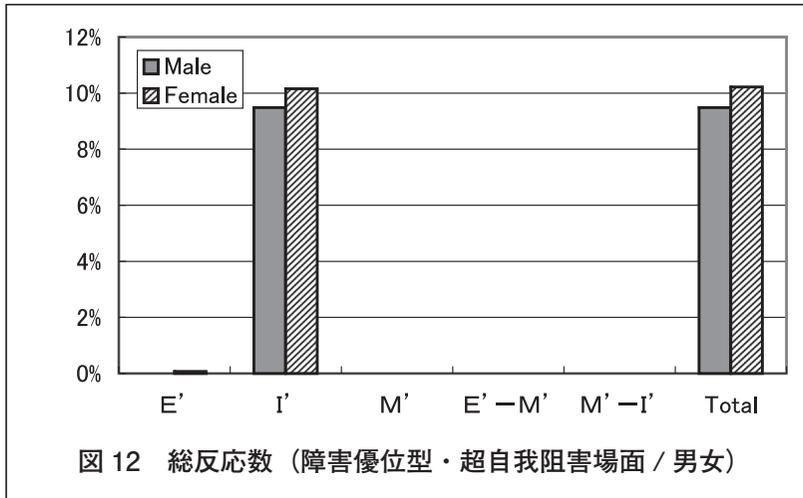


図 12 総反応数 (障害優位型・超自我阻害場面 / 男女)

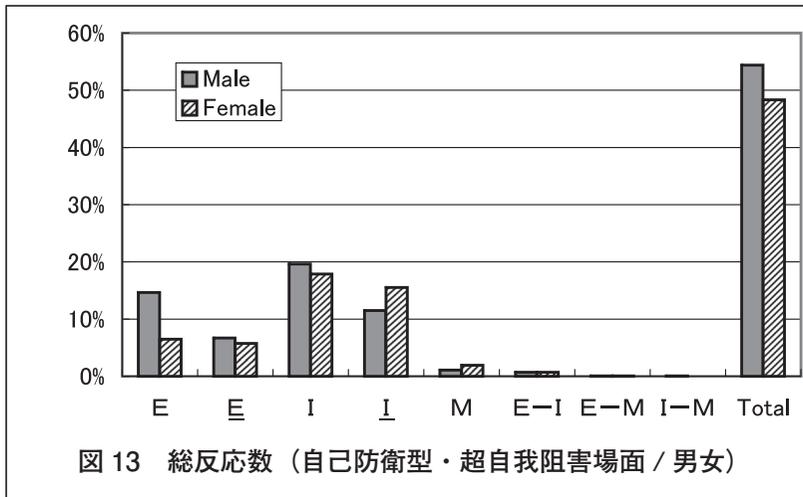


図 13 総反応数 (自己防衛型・超自我阻害場面 / 男女)

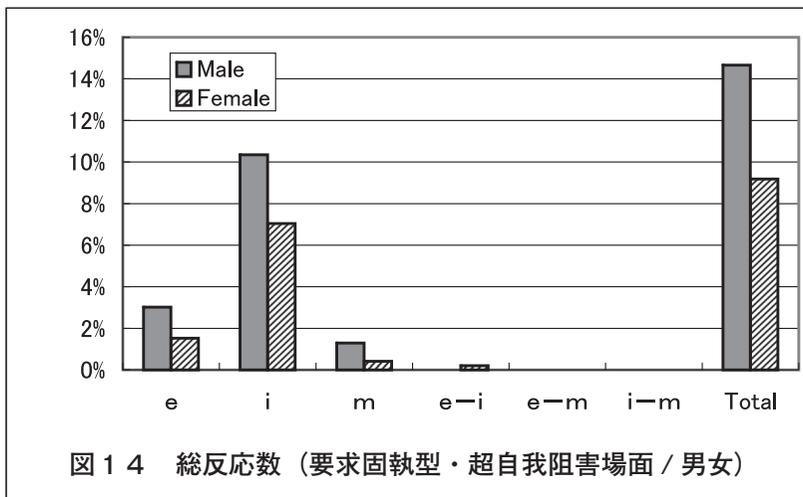


図 14 総反応数 (要求固執型・超自我阻害場面 / 男女)